

途絶えたメール

仇討ち

春日信彦

親友の事故死

T P P 参加によりCIA主導の経済復興に成功した日本は、憲法を改正し、アメリカとの連合軍隊を保有する天皇民主主義国家に生まれ変わった。年号は平成から大和に変わり、6月9日、皇太子とミスワールドの栄冠に輝いた和歌子妃の「結婚の儀」が執り行われた。翌年の新年祝賀の儀において、日本の女神となった和歌子妃の笑顔は、世界制覇を夢見る青年軍人たちを鼓舞し勇気づけた。

元旦の日の出に向かって、神に笙子との結婚を誓ったコロンダ君であったが、2日の10時過ぎに、Y新聞社に勤務する親友、森村から気絶するほどの訃報を受けた。それはA新聞社に勤務していた親友、野坂の川からの転落事故死であった。野坂は2日の午前7時30分ころ大阪市の道頓堀川で水死体として発見された。彼の血液から多量のアルコールが検出されたことから、多量の飲酒が原因で過度に酩酊し、誤って川に転落したものと推定された。したがって、大阪府警は事故死として処理した。

2日の夜はまったく眠れず、3日の朝を迎えた。コロンド君は野坂の事故死の悲しみは計り知れないほどであったが、それ以上に彼を苦しめたものは事故死の原因であった。というのは、学生時代はもとより、社会人になっても野坂は一切お酒を飲まなかったからだ。そのお酒が飲めない野坂が、お酒の飲みすぎで泥酔したあげく、誤って川に転落し、水死したというのは、コロンド君にとってまったく理解できない出来事であった。

そのことを考えていたコロンド君は一睡もできず、ベッドから立ち上がることもできなかった。3日はお菊さんと東京大神宮に参拝に行く約束をしていたが、そのことはまったく忘れていた。10時過ぎにドアがコンコンとノックされると、銀の鶴が舞う紺の着物を着たお菊さんがジャスミンティーをお盆に載せて入ってきた。「あら、坊ちゃん、今日はお菊とデートじゃなかったかしら？」お菊はお盆をテーブルの上におくとコロンド君のベッドに歩み寄った。

コロнда君は眼を醒ましていたが、立ち上がる元気がなかった。「あ～、すっかり忘れていたよ。今日は頭が重くてデートできそうに無いよ。悪いけど」コロнда君は寝込んだままつぶやいた。「あらま～、どうなさいましたの？ 笙子と喧嘩した夢でもみられたんですか？」急に不機嫌になったお菊さんは笙子への嫉妬心をあらわにした。お菊さんの不機嫌さに驚いたコロнда君は、顔を引きつらせ飛び起きた。

「あら、元気じゃないですか。早くいただかないと、せっかくの紅茶が冷めてしまいますよ」お菊はテーブルの椅子に腰掛けると、コロнда君がやってくるのをじっと待った。気まずそうにお菊さんの前に腰かけると、紅茶を一口すすった。コロнда君は昨夜の訃報のことを話すべきか悩んでいたところ、お菊さんが気遣って訊ねた。「坊ちゃん、何かお悩みでもおありなんですか？ お菊に話してくださいな」お菊は優しく訊ねた。

部屋着に着替える気力もわかず、ぼんやり考え込んだ挙句、昨夜の訃報を話す決意をした。「お菊さん、昨夜、信じられないような悲しい話を聞かされたんだよ。親友の野坂が酔っ払って川に転落して水死したらしいんだ。とにかく、今でも信じられないんだよ」コロダ君は顔を両手で覆って涙声で話した。「そうでしたか、先ほどはごめんなさいね、そんなこととは知らず、でも、お酒の事故はいつまでたっても減りませんね。お酒は怖いですね。坊ちゃんも気をつけてくださいね」お菊はコロダ君の肩をそっとなでた。

コロダ君は指先で涙を拭くと昨夜から思っていたことを話しはじめた。「どうしても信じられないと言ったのは、野坂は一滴もお酒が飲めないんですよ。野坂が酔っ払うということはありません。どう考えても、納得がいかないんです。誰かに無理に飲まされて、川に突き落とされたんじゃないかと思えて、昨夜から眠れなかったんです」コロダ君は事故ではなく他殺じゃないかとお菊さんに訴えた。

お菊は大きく眼を開き、頷きながら話しはじめた。「そうでしたか、野坂さんは下戸だったんですね。それなのに、酔っ払って、川に転落した。これは確かに、合点がいきませんね。でも、お酒が飲めない人でも、突然飲めるようになる人もたくさんいますから、本当にお酒を飲みすぎたのかもしれないよ」お菊さんは、他殺の線を思いとどまった。「そうだよな、お菊さんが言うように、飲めるようになったんだが、限度が分からず、雰囲気にもまれて飲みすぎたのかもしれないな」コロダ君も事故死のように思えてきた。

「お酒は怖いもので、人格破壊をするんです。酔うと、裸になったり、暴力を振るったり、いつもはおとなしい人でも、人格が変わってしまうんですよ。きっと、野坂さんも、お酒を飲むと人格が変わるタイプだったんじゃないですかね」お菊はクラブのママをやっているところを思い出し、事故を主張した。コロダ君は頷きながらじっと話を聞いていたが、心の底のわだかまりを話しはじめた。

「確かに、事故の可能性のほうが強いと僕も思うんです。ただ、ひとつ気にかかることがあるんですよ。ほら、お菊さんと11月末に嵐山でデートしたとき、偶然、野坂と彼女に出会ったのを憶えているでしょう。あの時、お菊さんと彼女をおいて、僕と野坂はしばらく立ち話をしていたでしょう。そのときの話を手短かに言うと、野坂が中州のソープで遊んだときに、和歌子妃がソープ嬢をやっていたという話を聞いたらしいんだ。これはおもしろいから、その話を編集長にするつもりだ、と野坂は言っていたんです」コロンダ君は皇太子妃の件が野坂の死とかかわっているのではないかと心の底で思っていた。

お菊さんは少しマジな顔になったが、笑顔を作るとゆっくりと話しはじめた。「坊ちゃん、考えすぎですよ。きっと、ソープ嬢が冗談を言ったに過ぎませんよ。巷では、こんな冗談はよくありますよ。野坂さんが亡くなられた事はとてもお気の毒ですが、これを教訓に坊ちゃんこそお酒に飲まれないようにお気をつけくださいよ」お菊はコロンダ君の疑問を打ち消した。コロンダ君はしばらく目を閉じていたが、クローゼットの紺のジャケットから手帳を取り出した。

手帳をめくり11月24日のページを開いた。「僕も冗談だとは思うんだが、やはり、ちょっと気になるんだよ。話をしたソープ嬢は和歌子妃と親友らしくて、一緒に働いていたときは毎日のように、皇太子と結婚した後でも最低でも一週間に一度は、メールのやり取りをしていたらしいんだ。ところが、10月5日を最後に、突然メールが途絶えたらしいんだ。毎日、彼女はこれが気になっていて、つい、野坂に和歌子妃のことを話したらしいんだよ。お菊さんはどう思う？」コロнда君は手帳を見ながら話した。

お菊さんは左手を頬に当てびっくりした表情で話しはじめた。「あら、冗談にしては、深刻な話ですね。このソープ嬢、かなり口上手じゃない。坊ちゃん、この話はもうよみましょう。単なる冗談ですよ。和歌子妃がソープ嬢をやっていたという物的証拠はないんだから。それよか、早く、着替えてくださいな」お菊はデートをしたくてうずうずしていた。コロнда君は目をギョロツとさせるとお菊に顔を近づけ話し始めた。

「実際に見たわけじゃないから、信用はできないんだけど、そのソープ嬢と和歌子妃が一緒に写った写真を野坂は見せてもらったらしんだよ。和歌子妃がソープ嬢であったという物的証拠にはならないけど、そのソープ嬢と和歌子妃が親友であったという証拠にはならないかい」コロンダ君は野坂の話信じていた。お菊は急に深刻な顔になった。「一緒に写った写真ですか。なるほど、もし、野坂さんの話が本当であれば、和歌子妃と親友だったことは間違いないわね。でも、親友だからといって、本当のことを言っているとは限らないわよ」お菊さんは女のねたみを考えた。

「そうだな」コロンダ君は一言言うとスツと立ち上がり、紋付袴に着替え始めた。「お菊さん、デートに出かけますか、野坂の事故は運命だと思いますよ。気分を切り替えて新年を祝いましょう」野坂の事故のことを忘れようと作り笑いをした。二人はタクシーを拾うと飯田橋駅近くで降りた。そこから歩いて東京大神宮へ向かった。門前からは参拝客の列が延々と続いていた。

いとこ婚

東京大神宮は縁結びの神で有名になり、若い女性たちが結婚成就を願って全国から参拝にやってくる。列に並んで最低でも約2時間は辛抱しなければならない。コロнда君はお菊さんと一緒に東京大神宮に参拝に行きたくなかった。行くのであれば笙子と行きたかった。だが、お菊さんの言葉に誘われてとうとう来てしまった。「笙子と結婚したいのであれば、東京大神宮に参拝なさいませ。お菊も一緒に祈願してあげますから」とコロнда君を誘ったのである。

列は少しずつ前進するが、2時間以上もお菊と一緒にいると思うと気がめいつてきた。もし、お菊でなく笙子であれば5時間でも10時間でもかまわないと思ったが、どういうわけか、横に居るのはお菊であった。お菊は今年で49歳になるが、化粧をすると35、6歳に見え、容貌は古手川祐子に似ていて、色気ムンムンの美女である。お菊は年上の恋人と思われることに喜びを感じている。お菊はコロнда君の左腕としっかり腕を組み、あたかも恋人であるかのように周りの若い女性に笑顔を振りまいていた。

ここ1年前から、特に恋人のように振舞うようになった。きっかけとなったのが、笙子との結婚話であった。父親に話す前に密かにお菊に相談したのが、不運の始まりになってしまった。笙子とはいとこにあたり、いとこは4親等であるから、法律上は結婚できる。ところが、お菊は大反対した。いとこの結婚は障害児が生まれるというのだ。確かに、障害児が生まれる確率は高くなるが、ほんの少し高くなるだけで、心配するほどの確率ではない。日本中にはいとこ同士で結婚した人たちがたくさんいる事を何度も説明したが、頑としてお菊は聞き入れなかった。

お菊と一緒に立っていると、お菊に結婚話を打ち明けた時のことが思い出されてきた。「お菊さん、ちょっと相談があるんだけど、聞いてもらえるかな」コロダ君はお菊が後押ししてくれるものと期待して相談した。「あら、改まって、どんなお話ですか？」お菊はまた奇妙な事件の話と思った。コロダ君は一呼吸するとゆっくり話しはじめた。「ぼく、結婚しようと思っているんだ。いとこの笙子さんと」コロダ君は思い切って打ち明けた。

「坊ちゃん、正気ですか？ 笙子はいとこですよ。いとこ結婚すると障害児が生まれるんですよ、ご存知じゃないんですか？ お菊は反対です！」 お菊は眼を丸くして大きな声で結婚に反対した。「お菊さん、そう興奮しないでください。いとこ婚で障害児が生まれる確率が高くなることは知っています。でも、それはわずかなもので、まったく心配ないんです。だから、法律で結婚が認められているのです」 お菊が血相を変えて反対するとは夢にも思っていなかった。

「その、ほんの少しが危険なんです。万が一、的野家に障害児が生まれたらどうなさるおつもりですか。坊ちゃんは一生苦労なさることになるんですよ、そこをよ〜く考えてみてください」 コロンダ君は事の重大さがわかっていないとお菊は思った。「確かに、お菊さんの言うことはもっともです。万が一、障害児が生まれたならば、命をかけて我が子を育てるつもりです。笙子ともそのことは何度も話し合いました」 笙子もそのことを心配し最初は結婚に反対であったが、次第にコロンダ君の熱意に負けて結婚する意志が固まっていった。

「坊ちゃんは、子育てなんかまったく分かっていないのです。子育ては口で言うほど生半可なものではないのです。障害児が居ては、坊ちゃんの将来に響きます。きっと、ご主人様も反対なされるはずですよ。一刻も早く、笙子と別れるべきですよ」お菊は強い口調で説得した。コロнда君はなんといいか分からなくなった。すでに、笙子とは結婚の約束をしていた。いまさら、いとも同士のだから結婚はできないなどと口が裂けても言えなかった。

「坊ちゃん、お分かりですか、笙子とは一刻も早く別れてくださいよ。ご主人様にはこのことは黙っています。まさかとは思いますが、エッチはなされてはないでしょうね」お菊はどの程度関係が深まっているか確認した。コロнда君は一瞬固まった。頭の中が真っ白になってしまった。福岡に遊びに行くたびに笙子とエッチしていたからだ。「分かりました。覚悟を決めて、分かることです。これは坊ちゃんのためであり、的野家のためです」お菊はエッチしていたと分かり、嫉妬の火山が爆発した。

コロンダ君がぼんやりしていると、お菊がひじで横腹をつついた。「ヒデ、何考えているの、もう少しの辛抱よ」お菊は恋人が言うようにコロンダ君をヒデと呼んだ。二人は約2時間半の辛抱の末に神殿にたどり着いた。お賽銭を投げ込むと、コロンダ君は笙子と結婚できますようにとお願ひし、お菊は二人が分かれまますようにとお願ひした。このとき、お菊は二人を別れさせる名案がひらめいた。

いとこ婚で障害児が生まれるというのは、別れさせるための口実で、お菊の本心は嫉妬から結婚を反対していた。お菊は10年前に家政婦としての野家に入り、お世話をしているうちに、徐々にコロンダ君が好きになっていった。親子ほどの年の差はあっても、そのことは愛情にはまったく関係なかった。お菊は猪突猛進のところがあって、好きになると周りがまったく見えなくなる性格であった。

お菊は京都出身で、老舗料亭の次女であった。19歳のとき結婚に反対され、東京に駆け落ちした。二十歳で男の子を出産したが、3ヵ月後に父親となった男は蒸発してしまった。やむなく、京都の実家に戻り子供を両親に預け、下京区にある会員制高級クラブで働き始めた。27歳のとき、当時弁護士をしていたコロнда君の父親、秀雄と出会い付き合うようになった。それ以来、愛人として秀雄と逢瀬を重ねるようになった。

コロнда君が19歳のとき、母親が乳ガンでなくなった。それを機に、お菊は家政婦としての野家に入ってきた。コロнда君はお菊が父親の愛人であったことは知らない。お菊は色白で、歌舞伎役者の女形のようなソフトな色っぽさを持った男が好きであった。秀雄は背が高く色白で甘いフェイスであったが、コロнда君のほうがもっとお菊好みであった。欲情的なお菊は嫉妬心が強く、興奮するとこめかみに青筋が立つほどであった。

「結のお守り」を手に入れた二人が自宅に到着すると、早速、お菊はコロнда君の書斎にブルマンのコーヒーを運んでいった。それは、参拝のときにひらめいたことを話すためであった。「お疲れになられたでしょう、東京大神宮に参拝したからにはきっと結婚成前は間違いなしですわ。コーヒーの香りは心を和ませますわね。あ、そう、帰りしなに思ったんですけどね、坊ちゃん、野坂さんの事故死の件ですが、酔っ払って、転落したなんて、ちょっと腑に落ちませんね。坊ちゃんが言うように、他殺かもしれませんよ」お菊はコロнда君に野坂の仇討ちをさせる名案を思いついた。

コロнда君はコーヒーを一口グイッと飲むと、顔を赤くして大きく頷いた。「お菊さんもそう思いますか。僕はずっと他殺と思っていたんですよ、誰かに、無理にお酒を飲まされて、川に突き落とされたに違いないんですよ。いったい、誰の仕業ですかね？」コロнда君は刑事の心になっていた。「お菊が思うには、ヤクザでしょうね。誰かに依頼されてヤクザがやったに違いありませんよ。和歌子妃の秘密をこれ以上探らせないようにするために、始末したんじゃないですか？」お菊の妄想がわいてきた。

コロнда君は大きく頷き、腕を組んだ。「なるほど、野坂を始末しなければならほどの和歌子妃の秘密があるってわけですね。和歌子妃がソープ嬢だったということを知っただけで、野坂は殺されますかね？ちょっと、腑に落ちないな～」頭の中に大きな疑問がわいてきた。「お菊も同感ですわ。他に何か秘密があるんじゃないかしら。天皇家にとって重大な何かが。和歌子妃を詮索されると困るような何かが、きっとあるんですよ」お菊はコロнда君の刑事心を煽り立てた。

コロнда君は残りのコーヒーを一気に飲み干した。「そうですよ、殺人をしなければならないような、重大な秘密があるんですよ。でも、警察は転落事故として処理していますからね～、いまさら、警察に訴えても無理ですかね」解決策が分からなくなったコロнда君は肩を落とした。「これは大事件かもしれませんよ、坊ちゃん。もしかすると、警察もグルかもしれません。天皇家を守るのが警察の役目ですからね。へたに警察にちょっかいを出すと、こっちまでやられるかもしれませんよ」お菊は警察を信用していなかった。

もはや、コロнда君の頭の中は仇討ちのことでいっぱいになっていた。「一体、どうすりゃいいんだ。野坂は犬死と言うことか。可愛そうに、僕は何もして上げられないのか？」コロнда君は両手で顔を覆い、涙を隠した。「坊ちゃん、こうなったら、二人で仇討ちをしましょう。例のソープ嬢は他に何か知っているはずですよ。まず、このソープ嬢を当たってみましょう、坊ちゃん」お菊は励ますようにコロнда君の右肩に手を置いた。

顔から両手を外すと涙目で訊ねた。「いったい、どうやってソープ嬢から話を聞きだすんだい？」コロнда君はソープに行ったことがなかった。「それは、坊ちゃんがソープに行って例のソープ嬢から聞き出すんですよ。仇討ちのためです、やってください」お菊は強い口調でハツパをかけた。「ぼくが行くんですか？一度もソープには行ったことがないんですよ。不安だな～」話は聞いたことはあっても行ったことはなかった。

「坊ちゃん、当たって砕けろ、です。まさか、お菊が行くわけにはいかないでしょ。資金はお菊が出しますから、勇気を出して、行って下さいな」お菊は作戦がうまくいき始めたことが嬉しくなってきた。「ソープ嬢から話を聞かない限り、解決の糸口はつかめないよな。よし、お菊さん、ソープに乗り込みますよ、何か、手がかりがつかめるはずですから」コロンダ君は仇討ちをする決意を固めた。

仇討ち

コロンダ君は手帳の11月24日のページを開いた。KURAYAのアヤを確認すると、ネットで場所と出勤を確認した。場所はワシントンホテルのすぐ近くで、アヤさんは1月13日が出勤と分かり、ソープの予約を取った。次に、ワシントンホテルは12日と13日を予約した。コロンダ君は12日に羽田を出立すると福岡へと飛んだ。ワシントンホテルはキャナルの内部にあり、ホテルのすぐ近くにソープ街があった。

KURAYAはホテルから歩いて約10分のところにあり、午後9時予約のため午後8時半にホテルを出た。橋を渡ると橋の袂の左手にあり、すぐに分かった。受付を済ませ9時ちょうどに入室した。一流ソープとあって部屋はホテル以上に豪華であった。コロнда君にとって一番心配だったことは、目の前に居る女性が果たして例の女性であるかどうかであった。服を脱ぐと浴槽があるバスルームに案内された。

裸の女性を見ていると緊張が高まってきたが、まず、確認をすることにした。「ぶしつけで、失礼なんですが、11月中旬ころ、ぼくと同じくらいの男性に和歌子妃のことを話されましたでしょうか？ぼくは彼の紹介でやってきました」コロнда君は単刀直入に訊ねた。彼女はしばらく黙って怪訝そうな顔をしたが、きれいな声で返事をした。「はい、それが何か？」彼女はコロнда君を刑事ではないかと警戒した。

「心配なさないでください、ぼくは刑事ではありません。彼の親友で、小説家の端くれです。申し訳ないんですが、和歌子妃の話をぼくにもしていただけませんか？決して、ご迷惑になるようなことはいたしません」コロダ君は安心させるために刑事ではないことを告げた。小説家の端くれと聞いて少しは安心したのか、笑顔を見せて頷いた。彼女はコロダ君の後ろに回り背中を洗い始めた。

「和歌子は20歳のころ半年ほどここで働いていました。和歌子とは親友で在職中も退職後もメールのやり取りをしていたんです。でも、去年の10月5日を最後に、突然メールが途絶えてしまったんです。和歌子の性格からして、まったく理解できないんです。和歌子が病気じゃないかと心配なんです」彼女は背中を洗い終わると正面にやってきた。スポンジに十分泡を含ませると右腕をゆっくり洗い始めた。

コロンダ君は野坂の話が本当であったことを確信した。「メールが突然途絶えるということは本当に奇妙な話ですね。でも、新年祝賀の儀ではお元気そうでしたね」コロンダ君はテレビ中継をお思い出していた。「そうなんです、私も和歌子の元気な笑顔を見ました。和歌子は、皇太子妃になったから私のことを忘れようとしているのかしら。でも、メールで私に相談していたのに、どうしてかしら」彼女は意味がはっきりしないことをつぶやいた。

「え、相談ですか？いったい何を相談なされていたんですか？聞かせてくれませんか？」コロンダ君は糸口がつかめそうで、はやる心を抑えて訊ねた。「和歌子は離婚したいって何度もメールしてきたんです。皇太子妃になんかなるんじゃない、離婚できないんだったら、自殺するって。監視され、束縛されたうえ、下女扱いされて、こんな生活は耐えられない。こんなことを何度もメールしてきたんです」彼女はメールの内容をかいつまんで話した。

コロンダ君の目は輝き始めた。「他に何か気づいたことはありませんでしたか？」彼女はコロンダ君の右足を持ち上げるとスポンジでゆっくりと洗い始めた。「あ、ちょっと気になったことがあるんです。新年祝賀の儀のとき和歌子は黒真珠のネックレスをしていたんです。びっくりしました。和歌子は黒真珠のネックレスは絶対しないと言っていたんです。というのも、和歌子のお母さんが黒真珠のネックレスをした日に交通事故でなくなったそうです。だから、絶対に、しないと言っていたのに、それなのに」彼女は和歌子への不信を口にした。

コロンダ君は左手を顎に当てるとしばらく考え込んだ。突然、メールが途絶えた。離婚できなければ自殺する。絶対しないと言っていた黒真珠のネックレスをしていた。新年祝賀の儀では元気な姿を見せていた。「お風呂にどうぞ」コロンダ君は湯船に案内された。風呂から上がり、真っ赤なソファに案内されると横に彼女が腰掛けた。「お飲み物は何になされますか？冷蔵庫にはソフトドリンクもございます」テーブルにはブランディーがあった。

ブランディを注文した。彼女はグラスにブランディを注ぎ、グラスを手渡した。おつまみが入った竹で編んだかごをコロンダ君の右手に置くと、彼女はプチチョコレートを口にそっと押し込んだ。「ご気分はいかがですか、和歌子の話は参考になりましたか？これを題材に小説を書かれるんですか？」彼女はいったいなぜ和歌子のことを根掘り葉掘り聞きだしたのか不思議に思っていた。

コロンダ君は一瞬野坂の事故死のことを話そうかと思ったが、話すのをやめた。事故死と聞けば、自分のことを刑事と疑うと思えたからだ。「まあ、そんなところです。趣味で書いているだけです。とても癒されました。また、福岡にやってきたときは、アヤさんを指名しますよ」コロンダ君は福岡までやってきた甲斐があったことに満足した。笙子のことを思うと少し罪悪感が起きたが、情報をくれたアヤに感謝の意を込めてキスをした。

コロンダ君は自宅に帰ると、早速お菊さんに報告することにした。お菊はお茶を入れて書斎に笑顔で入ってきた。「お菊さん、収穫がありましたよ。野坂が言っていたことは本当でしたよ」コロンダ君はアヤから聞いたことを順追って話した。「やはり、本当でしたか。和歌子妃はどうしてメールしなくなったんでしょうね。突然やめるって事は奇妙ですよ。離婚したい、自殺する、これはただ事じゃありませんね」お菊は妄想を膨らませ始めた。

コロンダ君はお茶をすすると、飛行機の中で考えていたことを話しはじめた。「お菊さん、帰りの道中で考えたんだけど、和歌子妃は自殺したんじゃないだろうか？離婚できなければ自殺するって言っていたからね。でも、現に和歌子妃は元気で生きているんだ。この点だけど、この和歌子妃は替え玉じゃないだろうか？自殺した和歌子妃そっくりに整形した偽者の和歌子妃じゃないだろうか？ちょっと、強引な憶測だけど」コロンダ君は考えた挙句、このような結論に達した。

お菊は真剣な面持ちで数回頷いた。「はい、その考えは当たっているかもしれませんがね。もしかすると、自殺じゃなくて、皇太子に殺されたのかもしれませんが。天皇家の出来事は誰も分からないのです。たとえ、殺人があっても警察は事件をもみ消す、とどこかの本に書いてありました。天皇家も警察も怖いところですよ」お菊は天皇家について書かれた本を思い出しながら話した。

コロンダ君は呆然として天井を見詰めた。「自殺じゃなくて、他殺ですか。これは恐ろしいですね。もし、和歌子妃が他殺であれば、野坂の他殺は十分考えられますよ。詮索するやからは、消されますね」コロンダ君はますます和歌子妃は殺されたように思えてきた。「お菊さん、天皇家のことはどうしようもないけど、野坂の仇討ちは成し遂げたいですよ。何かいい方法はありませんかね」野坂の他殺は間違いないと確信した。

お菊は残っていたお茶をすすって飲み終わると、眼を閉じて考え込んだ。コロンダ君もいろいろ考えたが、野坂を殺した犯人がヤクザであればどうすることもできないと思えた。きっと、指図したのは警察に違いないと思えたが、もはや、ヤクザと警察がグルでは太刀打ちできないとあきらめかけていた。お菊さんはゆっくりと眼を開けるとつぶやくように話し始めた。

「天皇家、警察、ヤクザ、A新聞社、を相手にけんかを売っても勝ち目はありません。へたに手を出せばこちらがやられてしまいます。分かっていることは、今の和歌子妃は偽者だということです。本物はだれかに殺されたに違いありません。おそらく、このことを知っているのは、亡くなった野坂さんとわれわれ二人じゃないですかね。そこで、われわれにできることといえば、このことを公に知らしめることです。でも、われわれが言っていることがばれれば、二人は消されるでしょう。1つの案ですが、2チャンネルを使って匿名で書き込みをしてみてもどうでしょう」お菊はこれしかないように思えて提案をした。

コロンダ君は大きく頷き眼を光らせた。「なるほど、2チャンネルを使うわけですか。今の和歌子妃は偽者だ。本物は皇太子が殺した。こんな文言を匿名で書き込むわけですね。もし、このことが事実ならば、偽者の和歌子妃はノイローゼになって自白するかもしれませんね」野坂への弔いはこれしかないように思えて早速書き込むことにした。もはや、改憲した新生日本は、CIA主導の軍国主義日本に変貌してしまった。

途絶えたメール

<http://p.booklog.jp/book/63844>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/63844>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/63844>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ